

切除した肝臓からアニサキスの虫体を認めた1例

◎山田 真美子¹⁾、大隈 潤子¹⁾、岩田 晃裕¹⁾、大杉 志絵¹⁾、水谷 雅子¹⁾、吉田 彩乃¹⁾、吉本 志保美¹⁾、藤田 智洋¹⁾
小牧市民病院¹⁾

【はじめに】アニサキス症の多くは、胃アニサキス症、小腸アニサキス症であり、消化管外アニサキス症はまれである。S状結腸癌の術前診断にて肝転移を疑った組織からアニサキスの虫体を同定できた症例を報告する。

【症例】50代男性。貧血と便潜血陽性にて他院でCTを施行しS状結腸癌、膀胱浸潤の疑いがあり手術目的に当院紹介となった。当院の術前精査にて、S状結腸癌の間膜内突破膿瘍腔により膀胱内への穿通を認めた。肝末梢に転移を疑う結節影が1個みられた。血液検査では、貧血と軽度の腎機能低下、HBs抗原が陽性であった。S状結腸膀胱前立腺合併切除術が施行され、その2か月後にストマ閉鎖術と術前より指摘されていた肝結節の部分切除術が施行された。

【病理所見】肝部分切除の肉眼所見では、6mm大のベージュ色の腫瘍が観察された。HE染色での組織所見は、好酸性の構造物が4個みられ、それを取り巻くようにリンパ球浸潤巣があり、その周囲に類上皮肉芽腫が形成されていた。好酸性にみえた構造物は凝固壊死しており内部

の観察が困難であった。鍍銀染色で、わずかながら内部に管状の構造がうかがわれた。変性が高度であり同定は難しいが、寄生虫を疑う所見として報告された。S状結腸癌の転移所見は明らかではなかった。後日、コンサルト先でFFPE切片から遺伝子検索を行い、DNA断片220bp (24Cl6_sample) で分子同定し、配列から Anisakis 属のクラスターであることが判明した。DNAが少量のため種鑑別までは不能であった。4個みられた好酸性の構造物はとぐろをまいたアニサキスが4か所スライスされた可能性を考えた。

【考察】当病理検査室では、一般検査から検出されたアニサキス虫体の標本を作製し、今回の症例の肝組織内の虫体と比較した。肝内の虫体は変性高度であったが、大きさが類似しているのが確認できた。鍍銀染色によりアニサキスの腸管構造をみることができた。

【結語】アニサキスが肝組織内に迷入し、遺伝子検索で同定できた症例を経験した。

連絡先：0568-76-4131（内線4140）